

日本語といふもの (第四回)

— 日本語の語詞 —

藤原与一

(1)

はじめに

一々の単語のことを語詞と云います。私どもがコトバといつた場合、時には言語一般をさし、時にはまとまった表現をさし、また、時には一々の単語をさします。一々の単語もコトバといえます。単語がコトバであることを言いあらわして、語詞と言います。

さて、私どものことばの生活を反省してみますのに、この毎日のいとなみは、個々の単語を利用する生活です。一々の単語が、言語生活の基本であるということができます。

こういうわけで、国語についても、単語—語詞という観点でものを考えることが、重要になってきます。

語詞の問題は広汎であります。ここでは、人が脚下に国語の眞実を把握すべきことを念として、いくらかの卑近な問題をとりあげてみましょう。

新語

さいしよにとりあげてよいのは、新語の問題です。

私どもは、生活の必要に依じて、ことばをつかいます。生活は、日進月歩、うごいてやみません。生活がうごけば、必

要もうごきます。そこで、ことばも、いろいろに、新しいものが要求されてきます。こうして新語が発生します。

新物新語、時の生活の必要に依じて、新しい物—生活の用具が発明され、新作されれば、それに新語がかぶせられるのは当然でしょう。近代の物質文明は、つきつぎに、新語を産みました。西洋文明の輸入に急であつたわが国では、とかく、外来の語詞をそのままに国語化したものが、多く見られるだけです。それにしても、近來ますますさかんな外国語使用癖を見ますと、ここには、模倣に敏感な国民性の問題もあることを、みとめないわけにはいきません。

物の名以外でも、若い世代の人々が、いろいろと、外国語をつかうことは、今日いちじるしいものがあります。たしかに、ここには、一つの国語問題があります。

今日はまた、外国語にかぎらず、さまざまな流行語が、新語・珍語として、はやりがちです。これらは、しばしば、識者の批判の対象ともなっています。これらは、しばしば、流行語の生命はじつにみじかいものだといふことも、今日は、すでにだいぶん、世人に理解されてきたかと思ひます。流行語そのものは、大したものではないといえましょう。しかし



流行語を追いがちの気風、感情には、問題があります。輕薄は、どんな場合にも、ためにならないと思うのであります。

以上、いちおう、かぎった見かたで、新語を問題にしてみました。ひるがえって考えてみますのに、私どもの日本語の、どんな一ことばも、もとをただせば、新語でないものはありません。みんな、発明され、創作されてきたものであります。古語もいつかは新作されたものであり、現在も、多くの新語が製作されつつあります。

このような、国語本来の領域での製作作業については、まず、無名の製作者、だれとはなし・いつとはなしの製作者ということが考えられます。また、村のしゃれ者・巧者の創意くふうということなども考えられます。つぎに、これが広まるについては、社会の自然の共鳴ということが考えられます。つまり、きわめて穏当な流行ということがあります。つぎに、このことばの、その後の衰盛ということが考えられます。衰退のしかたというようなものも考えられます。

一つの語詞が、世の中に出て、ひとりまえになったとすれば、これは、国民の大衆が育てたようなものでしょう。この事実に対応して、左には、命名の心理をすこし分析してみます。

命名の心理

大衆的な命名心理には、つぎのような特長があります。

(一) さっそくに、対象の急所にせまる心のはたつき。たとえばあの小動物の丁斑魚を、さっそくに「目高」と表現し

ました。直観直叙です。さっそくに相手の急所にせまって、観察、把握は鋭敏です。これが大衆の知力です。めだかの場合は、大衆といっても、おもに子どもです。(そうして、子どものこの直観力は、歴史的なものです)。「目高」は「目太」^{メブ}「目ぼっち」とも描かれています。

農人たちが馬鈴薯を「弘法芋」と言ったのは、弘法大師への民間信仰をそのまま表白したものでしょう。これをまたかんだんに、「二度芋」「三度芋」などとよんでいるのは、いかにも、生活の便利によったものです。素朴雄勁な命名と言えましよう。

今日、だれしもあやしまないでつかっていることは、「新聞」という語詞は、おもしろいことばだと思います。「新しい、聞く」！新聞！早いまとめだと思えます。このようになるときが、民間大衆の感覚にあることを、たいせつに思わないではいられません。

(二) しゃれ。「鳥打ち帽子」という語詞を見て下さい。こんなしゃれた名が、またとあるでしょうか。人は、当意即妙に、「鳥を打つ帽子」と、このことばをまとめています。

ねぎのことを「ピトモジ」というのは、なかなか、上品にしゃれたものだと思います。ねぎはもと、「キ」と、一文字ことばに言っていたものようです。これは、他の「キ」ということばとまぎれて、きつと不便だったにちがいありません。そこで考察したのが、「ピトモジ」という新名でした。

「キ」はまさに一文字なので、そこをさっそくとらえて、新しい名、ねぎのための特定名を作ったのであります。「前栽ガイモンのものヒトモジ」などと言うと、いかにも雅味がありますしやう。

見かたによっては、「夜なきうどん」というのも、じつにしゃれた名だと思えます。夜ふけのおもてをゆくあのチャルメラの音を聞いて、かつはゴトンガタンという車の音を聞きながら、これを「夜、なく、うどん」と名づけたのはいかに秀逸といえます。

(三)こっけい。「ゴミサガシ」ということばがあります。あの、冗談まじりに、だんだんに値を下げていって売る茶碗屋のことです。道ばたに店をひろげて、威勢よくやっているのを見れば、まこと「こみ、さがし」であります。これをこう言いあらわしたのは、まことによくこっけいみをうち出したものと言わなくてはなりません。民間の命令には、こっけい感を宿したものが少くありません。ことに卑俗なこっけい感情は、多くの場合に流露していがちです。「ひより見主義者」を「またくらこうやく」というのなどはその一例です。

(四)諷刺。卑俗なこっけい感情とわりにあい近いものに、諷刺の気分があります。命名には、この気分もまたよく出ます。人のお先棒をかつぐもののことを「チョーチンモチ」などと言いますが、巧妙な比喩によく諷刺を托したものはありませんか。

(五)制肘の心理。村落社会では、その日常生活で、世間のよいうわさをもてはやすことはすくなく、くかく非議すべきことに熱中することが多いようです。好評はつたわりにくく、悪評の脚は早いあります。悪と不正をとがめる村の倫理感情はきついても言うことができましよう。

人の性質・性情・身もちなどをあらわすことばにしても、たとえば、はたらきものをほめる語詞は少くて、なまけものをせめ、なじり、やじり、笑いする方の語詞は、とかく多いようです。大衆は、そういう、制肘の方向に、よりつよい関心を示してきたようであります。

以上の五項目は、とりあえずつかむことのできる、おもしろいものでした。さらに、他方面への注意と検討とがいることは、申すまでもありません。

造語法

つきには、語詞の製作を、形式面から見ていきたいと思います。これも、左に、目ぼしいものを、いく項目かあげていきます。

(一)「名詞十名詞」この方法で、多くの新語が作られます。「ほうき」という名詞がありますと、これにもう一つの名詞を冠して、「庭ほうき」「茶の間ほうき」などと、特定のはうきごとに、新名をつけます。「電信柱」というのがありました。これも、「電信」と「柱」との複合製作です。この名を用いている村へ、やがて電燈がつくようになりますと、この方の柱は、「電気柱」とよばれました。ところで、「デンシン」と言っていた語気はまだわすれられなかったと

みえ、電気柱の方をも、「デンキン柱」とよんだりしています。これはちよっとこみいった複合です。

(二)「動詞連用形+名詞」この方法も、国語の造語法の、一つのたいせつなものです。たとえば「場」という名詞がありますと、この上に動詞の連用形をつけて、「ながし場」「あそび場」「おどり場」などと、新語を作ります。「金」に対しては、「うけ金」「とめ金」「ひき金」「かけ金」など。

動詞のかわりに形容詞がくるとすれば、その語幹がきます。たとえばえらい人のことを言う「エラ人」など、「えらい」の語幹「エラ」がきています。「早細工」というのもまたこの例です。

(三)「名詞+動詞連用形」。おもしろいのはこの方法です。国語の造語法の中で、これは、もっともさつそくな、如才のない方法だと言えましょう。借金取りにくるから「借金とり」、御用を聞きにくるものは「御用ぎき」です。店をしまつたら「店じまい」、お礼にまわれれば「お礼まわり」です。すべて、日本語で、上から下へ、ものを言っておろすとおりに、語詞を作っていきます。ですから、ほんとに、造作はないわけです。これで、りっぱに、新しい一単語になるのですから、つごうがよいではありませんか。これまで、私どもの先輩たちは、こだわりなしに、時には、何ということもなくおさざっぱに、この種の方法による語詞製作をやってきました。今も、幼い子たちは、平気で、自由に、この種の造語をやっています。お母ちゃんは「ぞうきんあらいい」、わたしは

「おえんがわふき」〃、お父ちゃんは「くわつかい」、わたしは「草ぬき」「草ひき」「草むしり」〃。この方法は、日本語表現法の流れに即応した、自然妥当の造語法と言えます。上の名詞が、動詞連用形の名詞化したものであってもよいことはもちろんであります。「かけとり」というのでは、「かけ」が、もともと動詞連用形です。

名詞と動詞との結合のしかたは、いろいろ、自在であり得ることは、つぎのとおりです。「草とり」は「草ヲトル」、「盆おどり」は「盆ニオドル」、「手ばつり」(手斧)は「手ヲハツル」。どんな結合関係であらうとも、結合してしまえばえすれば、もう、それなりの、がっちりとした一語になります。

動詞連用形のかわりに、形容詞の語幹がくれば、「色しろ」「気みじか」などとなって、また有力な新語になります。

(四)「名詞+動詞連用形+名詞」ここで、この造語法が注意されます。例をあげると、さきの「鳥十打ち十帽子」のようなものです。「目十さまし十時計」、「背十待ち十草」など、いろいろあります。考えてみますと、まことにおもしろい造語法で、中間の動詞連用形は、上下の名詞二つをむすびつける接着剤のようなものです。この有効な接着剤が自由にはたらい、難なく、と言いたいくらいにおもしろく、上下二つの単語を、一つの構造にくくりあわせませす。

このようないとなみの結果、注目すべき名詞、味わいの深い語詞ができていくことは、だんだんにお気づきでしょう。

(五) 右三項で見られるように、動詞連用形は、日本語の造語法において、まことに重要な因子となっています。そして、これ一つも、単独に、名詞化しているのであります。

「とまり」「ながし」「おち」「うけ」など、すぐに、その多くの例をあげることができます。

以上はもっぱら名詞のことでした。ほかの品詞についても国語本来の造語法が、いろいろにながめられます。

(六) 形容詞づくり。たとえば「アタラシー」というのがありますと、その応用で、「ニージー」(新しい)「フルシー」(古しい)というのを作っています。「笑止千万」の「笑止」については、「シヨージー」という形容詞ができており、これは東北の方で、おもに、「気のどくな」という意味につかわれています。

「ばかラシー」「あほラシー」などというのがあります。これは、「ラシー」という台を利用して、この上に、いろいろのものをのせては、一個の形容詞を作る造語法です。「クサイ」という台がありますと、これは、「水クサイ」「辛気クサイ」「ばかクサイ」というように、よく利用されます。

こんなふうにして、語詞は新作され、ふやされていっています。副詞のことを考えて下さい。その擬声語、擬態語などじつにさまざまに、しかも単純に、多くのものが作られています。「カラカラ」「ガラガラ」「グッラグッラ」など。「クネクネ」「グニヤグニヤ」「クニヤクニヤ」など。

[2]

自由な造語力を伸ばす

小さい人たちは、ずいぶん自由自在に、語詞を創作するものです。これは、指導者としては、大いに着目して、その発表を、引き立てるように引き立てるようにしたらよいと思います。たとえば、放課後の掃除のひと時のかれらの生活にのぞんでも、その「机カキ」「ぞうきんフキ」とか、「まどソウジ」「かってアソビ」とか言うのを、耳に聞きしめて、その自由自然な創作生活を見まもりませう。先生も、できるだけくだけて、いろいろなことばを作って、かれの前でつかってみませう。よいものは自然に利用され、育てられていくでしょう。何よりとうといのは、こんな自由創作の態度を助長する訓練にはげむと、かれらは、しだいに、ことばの生活を、のびのびとやっっていくようになることです。

生活のことばを見つめさせる

言語生活は、個々の単語を利用する生活だと申しましたが、その個々の単語を、上に見たような造語法や命名心理のことなどでとらえさせますと、単語というものの把握が、生活に即して確実になります。把握が確実になれば、利用は的確になります。選択も巧妙になると思います。

語詞のことも、しょせんは、人々、その身にかえて、身のまわりから考えていき、身のまわりからことを明らかにしていかなくはなりません。こうして発見し自覚し得ることが、その人にとって、一ばんほんとうのものだと言えます。

(三〇・九・三)